

SNW 対話イン関東複数大学 2016 報告書

2016年10月8日

世話役 矢野亮太 (学生)

若杉和彦(シニア)

報告者 大野 崇 (シニア)

集合写真



[概要]

日本原子力学会学生連絡会会長の矢野亮太君のご努力で、SNW と関東複数大学の学生との対話会が開催された。

今回の対話会では、全員によるパネルディスカッションとシニアのパネリスト毎に分かれての個別討論を組み合わせ、ならびに、テーマには「福島関連」「リスキミ関連」に加えて「意思決定関連」「キャリアパス関連」というこれまでにない視点を取り入れた。これまでのシニアの原子力への取組経験の伝授・伝達や原子力への理解促進とは一線を画す内容であり、パネリスト、モデレーターの的を得た運営により、学生の期待に沿うことができたのではないかと思います。とりわけ後半のパネリスト毎に分かれての討論は、両方向性を高くす

るので、よい試みであった。

終了後の懇親会では、学生の最も関心のあるシニアの経験談を交えた会話が行われ世代間の垣根が取り払われた。

また、参加学生も原子力系（東大、東工大、都市大）に加え、教員志望（内定済）の学芸大学生が加わり、学生連絡会の文系、教育系、女子大に幅を広げたいのとの期待に沿うものであった。

[開催要領]

- ・日時：平成28年9月24日（土）14:00～17:10
- ・場所：東工大大岡山キャンパス 北2号館参加者（敬称略）
- ・参加者：
 - 教授；東京工業大学 西山先生
 - 学生；12名（東京大学大学院 工学系研究科 原子力国際専攻 7名、東京工業大学 原子炉工学研究所 1名、東京都市大学大学院 原子力安全工学科 2名、東京大学大学院 新領域創成科学研究科 1名、東京学芸大学 1名）
 - シニア；荒井利治、石井正則、大野崇、川合将義、坪谷隆夫、早野睦彦、若杉和彦
 - オブザーバー：村井正人（日本電機工業会 原子力部）
- ・スケジュール；
 - 14:00-14:15 開会挨拶（矢野君、荒井）、学生連絡会についての説明（矢野君）
シニア紹介（若杉）
 - 14:15-14:25 パネリストプレゼンテーション1(福島関連；川合)
 - 14:25-14:35 パネリストプレゼンテーション2(リスコミ関連；坪谷)
 - 14:35-15:15 パネルディスカッション1(原子力業界の話；シニア全員)
 - 15:15-15:25 休憩
 - 15:25-15:35 パネリストプレゼンテーション3(企業意思決定関連；石井)
 - 15:35-15:45 パネリストプレゼンテーション4(キャリアパス関連；早野)
 - 15:45-16:25 パネルディスカッション2(企業・研究機関OBとして；シニア全員)
 - 16:25-17:00 少人数対話(テーマ自由，学生が聞きたいことを聞く；シニア全員)
 - 17:00-17:10 閉会挨拶（石井、矢野君）
 - 17:10-17:25 事後アンケート記入
 - 17:30- 懇親会
- ・プレゼン：
 - プレゼン1（福島関連）川合
 - プレゼン2（リスコミ関連）坪谷
 - プレゼン3（企業意思決定）石井
 - プレゼン4（キャリアパス）早野
 - パネル司会；荒井

[シニア感想]

荒井利治

今回の対話が初めてパネルディスカッション方式で行われることになり、幹事からその司会を割り当てられた時、始めはその任にあらずと辞退したいと思った。処が状況がわかるにつれ不思議な縁を感じるようになり、最後の貴重な機会と考え承諾。その縁とは第 1 に関係している人、東京都市大（元武蔵工大）の羽倉先生、東工大の西山先生はS N W対話会の第 1 回及び第 2 回での学生連絡会の会長で対話をした方々だった。第 2 は会場が、懐かしい東工大であったこと。そして第 3 は時節が 2002 年、将にアメリカの同時多発テロの年だったが、現在また欧米は次々とテロ事件に巻き込まれている。何か不思議を感じる。

これまでの対話会の歴史を振り返ると、対話会の主体はあくまで学生で企画、運営などを一切任せて、教官やシニアはそれに沿って対応する建前で推移してきた。しかし実際は都会、特に東京と地方大学ではかなり様相に差を感じた。前者が「個」、後者が「全体」に重きを置いている、俗っぽくいえば「ばらばら」と「まとまっている」。これは都会を纏める学生に大きな負担を強いる。

今回学生側をのまとめに当たった矢野さん（東大）と事務方を引き受けられた三島さん（東工大）は時間と場所の制約から大変な苦勞をされた。これは今後の課題として検討されるべき点であろう。

パネルディスカッションでのシニアのパネリストの方々は初めての試みだったが、不手際が多かった司会（荒井、矢野）にも係わらず、良く対応していただき、立派なプレゼンであったと思う。しかし全体の時間（今回は 3 時間）はあと一時間ほしかった。後半の小グループでの対話がより深い（上記「個」の力を出した）ものになったのではと思う。

以上を補っても余りあったのが教室での懇親会であった。西山先生の大変なお力添えで素晴らしい会場が設営され、大いに討議と交流が盛り上がった。中でも 2 名の女子学生（UndarmaaBaatar khuu さんーモンゴル留学生ー東大、三島さんー東工大）が知性を輝かせて花を浴えて下さった。国際化と女性の進出促進が羨しい昨今、時代を先取りした形で、最高齢シニアにさらに元氣をもらった対話会であった。

石井正則

今回の対話会では、全員によるパネルディスカッションとシニアのパネリスト毎に分かれての個別討論を組み合わせ、ならびに、テーマには「福島関連」「リスコミ関連」に加えて「意思決定関連」「キャリアパス関連」というこれまでにない視点を取り入れた。この結果、手法とテーマともにユニークな対話会になった。これまでのシニアの原子力への取組経験の伝授・伝達や原子力への理解促進とは一線を画す内容であり、ややもすれば一般論や処世術になる懸念を感じたが、パネリスト、モデレーターの的を得た運営により、学生の期待に沿うことができたのではないかと思う。とりわけ後半のパネリスト毎に分かれての討論は、両方向性を高くするので、よい試みであったが、全体としてはもう少し時間をほしかった。とはいえ、これからの対話会の一つの方向を示唆する対話会であった。

今回の全員参加のパネル方式は初めての試みであったが、モデレーターを務めた荒井さんと矢野君（学生連絡会会長）の周到な準備と進行があつて、アットホームな雰囲気を醸成、大変スムーズに進行した。

更に終了後の懇親会にも全員参加いただき、議論と理解を深めることができた。

また、参加学生も原子力系（東大、東工大、都市大）に加え、教員志望（内定済）の学芸大学生が加わり、文系、教育系、女子大に幅を広げたいのとの期待に沿うものであった。学生連絡会の諸君には、これからも引き続き新しいスタイルへのチャレンジを期待する。

今回の対話会では対話会草創期の学生連絡会幹部（現YGN幹部）であった東工大・西山氏、都市大・羽倉氏、東大尾・島田氏の支援をいただいた。対話会が新しいフェーズに入るのに際し、一緒に試行錯誤しながら一緒に進めて行きたいと念願する。

大野 崇

初めて関東複数大学の対話会に参加した。日本原子力学会学生連絡会が企画しパネルディスカッション形式で行われ、学生側からの要望で、「福島事故での課題」、「我が国におけるリスクコミュニケーションの課題」、「企業における意思決定の実態」、「キャリアパスの実態」についてシニアがプレゼンテーションを行い、学生からの質問に答える形で進行した。懇親会では、院へ進むことの意義、就職する企業のカラー、将来の職業選択など、学生の抱く悩みについてざっくばらんな意見交換を行った。

学生は、東大、東工大、東京都市大、東京学芸大、東京農業大から18名集まり、1名のモンゴルからの女子留学生が参加した。自ら参加しただけあつて優秀な学生が多く、リスクコミュニケーションといっても非専門の一般の人に科学的事実を理解してもらうのは難しいのではないかと、伊達市は除染基準を5mSv/hとしたということであるが住民からクレームが出なかったのか、何故伊達市ができて他の市は出来なかったのか、教職に就くが学校教育にリスクコミュニケーションをどう取り入れたらよいか、事故の原子力事業への反映は、企業理念は一流を目指せとあるが何を持って一流とするのか/GDPか他の指標か、など地についたレベルの高い質疑が行われた。

同じ連絡会のシニアと若手の交流という意味で、本対話会は有意義であつたと思う。

川合 将義

学生の参加者18名の内訳は、原子力関係15名、新領域創成科学1、農学系1、教育系1であつた。原子力外の参加は好ましく感じた。

今回は、福島のことの講演を頼まれた。いろんな基準が生まれた。とりわけ、除染、放射能汚染食品、過酷事故時の重要指定区域UPZについては、国際常識を越えて厳しい。そのことを伝えるには、単に国際基準から離れているというだけでは、説得力を持たない。それなりに工夫をこらして説明した。反響は、科学的に正しい選択をした伊達市民がいかにか納得したかを問うものであつた。事前の往復書簡があれば、もっと活発にできたことと考えます。

議論では、原子力系より、他の研究系の発言が多かつた。この意味から、原子力系以外の参加が多い方が、議論が活発になるように思う。

特筆すべきは、日本において放射線のリスクコミュニケーションがうまく行かない理由を聞かれたことである。何故、いわゆるステークホルダーの対話が、日本では難しいのか。また、日本において重要な政策が地元との軋轢で決まらない。やはり、互いの主張をぶつけることが、議論とされているふしがある。互いの主張を理解し、合理的に決めようと言う気持ちを形成するように努力することが重要である。その条件として、中立的な専門家が必要である。今後、こうしたことを伝えて、日本人の政治を司る能力向上が得られるように学生たちを指導できたらと思う。その意味で、文科系も含めた幅広い学生の参加は良かった。

学生諸君の将来であるが、多くは会社に就職して、いずれ幹部として活躍するものと思われる。そのためのキャリアアップが示された。中には、研究者の道を歩むものもあろう。そんな人向けのメッセージを送った。いずれにせよ、人格形成と実力養成し、どの立場でもビジョンが形成できるように努めることが必要であろうと。

分かれての議論では、除染後の帰還について話した。放射線不安もあるが、過大な賠償金が、実直で形容される福島の人々の心を害した話をした。チェルノブイリ事故関係者から過大な賠償は避けるようにとの助言があったにも係わらず、それが活かされなかったことも伝えた。今後の教訓としたい。

坪谷隆夫

1. 対話幹事が指摘しているように対話会の準備時間が十分ではなく参加する学生諸君との往復書簡もなく対話会が開催されたことは若干残念であった。
2. あらかじめ往復書簡を実施せず、その代わりおよそ20名の原子力系だけでなく文系の学生が参加したことで、この対話会が学生とシニアばかりでなく学生間の交流を期待できるとの学生側の幹事である矢野亮太君の言葉も理解できる。
3. 今回のパネルで学生側が取り上げた福島問題、リスコミ、企業意思決定、キャリアパスのように、原子力技術を掘り下げると言うよりは企業や社会についてシニアの経験に基づく幅広い話を聞くことに学生側としての対話会の意義を見いだしているように感じた。
4. シニアも対話会に対する学生側のトレンドをしっかりと受け止めることが大事ではないかと思った。
5. 今回の学生側幹事の呼びかけに答えて参加した学生諸君はいずれも活動的な気構えを持ち視野を広げる努力をしていると思う。対話会でも話したが社会に出たら「一流」の先輩、経営者などを見つけて一流を目指して研鑽を積んで欲しいものだ。
6. 最後に、“卒業生”である羽倉先生、西山先生をたたえつつ11年間引き継がれてきた対話会を振り返る荒井さまの挨拶は、矢野君による学生連絡会のシステム構築に努めているというスピーチと重なって感銘深いものがあったことを述べておきたい。

早野睦彦

今回の対話テーマは、学生からの希望で「福島事故関連」「リスクコミュニケーション」「企業意志決定関連」「キャリアパス関連」の4つのテーマに分けてオムニバス形

式で行うことになった。

私は「キャリアパス関連」を担当することになったが、キャリアパスとはあくまで過去や現在の話である。今後の日本社会の変化に伴って会社も体質を変える必要がある。会社の視点も然ることながら、我が国の 21 世紀をどのように考えるかについて課題とそれに対するヒントを与えたつもりである。また、キャリアパスとしての一般論は私にはとても話せないので、自分の社会人人生で、その岐路を振り返りつつ経験談を語った。

今回の対話会企画は相当早いうちから立ち上げたのだが、学生側世話役の矢野亮太君が忙しくてその後の具体化が捗らず心配した。しかし、結果的には学生も 20 人程度集まりなかなか良い対話会になったと思う。

オムニバス形式という素案は学生側の提案に基づいたものであるが、これを荒井さんに具体化していただき、司会を荒井さんと矢野君の 2 人で相互に受け持って時間進行もスムーズに行った。荒井さんの取計らいに感謝する次第です。また、西山先生も参加された。関東複数大学の対話会では学生にまかせっきりで先生が参加されないことが多いが、やはり会場の手配など先生による寄与は大いにありがたい。併せて感謝します。

参加校は、東大、東工大、学芸大、都市大の 4 校であったが、女子大も含めてもっと拡がりがほしいものである。

若杉和彦

今回の対話会は、参加学生の顔ぶれが分かったのが開催日まで 1 週間を切る直前であったため、予定通り実現できるのか事務方として心配したが、結果 OK で有意義な対話ができたと満足している。特に矢野君が中心に行った参加学生の募集では大変苦勞されたようで、また東工大の西山先生や都市大の羽倉先生にはサイドから応援いただき、ともに心から感謝申し上げたい。他の大学や高専では教員の先生方が中心になって企画して下さることが多いのだが、東京では事情が大きく異なっている。このことに留意して今後の対話会活動を進める必要があろう。

対話の進め方は学生側の希望によりパネルディスカッション方式とした。テーマも従来のエネルギーや原子力の役割と言った基本的なものと異なり、これも学生側の希望によりリスコミやキャリアパス等、今の社会問題や産業界の現実に即したテーマとなったが、川合、坪谷、早野、早野の諸氏は適切にご自分の考えを含めて解説された。また、司会を荒井様をお願いしたが、矢野君とともにみごとに会場とのコラボを効果的にまとめていただいた。

対話会後の懇親会は同じ建物内の別の場所で開催された。参加学生の中にはモンゴルからの留学生を含めて 2 名の女子学生が含まれ、幅広い話題について活発な意見交換が行われた。今回は報告書にあるとおり東大、東工大、東京都市大等限られた大学からの学生参加であったが、出来ることなら関東地区の早大や慶大等他の大学や文系

の学生達も含めた対話会を企画できればと思う。また、対話会のテーマの選択についても今回は過去と一味違ったものであり、この経験も大きな収穫であったと考えている。最後に対話会に参加していただいたシニアの各氏に感謝したい。

以上